



| | |
|--------------|---|
| Title | 日本語動詞述語文の表現類型に関する研究 |
| Author(s) | 森山, 卓郎 |
| Citation | 大阪大学, 1987, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/29080 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

| | | | | |
|---------|-----------------------------|------|----|-----|
| 氏名・(本籍) | 森 | 山 | 卓 | 郎 |
| 学位の種類 | 学 | 術 | 博 | 士 |
| 学位記番号 | 第 | 7606 | | 号 |
| 学位授与の日付 | 昭和 | 62年 | 3月 | 26日 |
| 学位授与の要件 | 文学研究科国文学専攻 | | | |
| | 学位規則第5条第1項該当 | | | |
| 学位論文題目 | 日本語動詞述語文の表現類型に関する研究 | | | |
| 論文審査委員 | (主査) 教 授 宮地 裕 | | | |
| | (副査) 教 授 德川 宗賢 教 授 前田 富祺 | | | |

論文内容の要旨

本論文は、現代日本語の動詞述語文の表現類型を、形態・語句・文の三つのレベルにわたる意味論的文法論として考察・記述したものである。

第I部（序論）では、本論文の基本的な考え方と研究史上の位置づけ等を述べ、とくに語彙的意味とのかかわりにおける客観的文法記述の必要性を説く。たとえば受身文についても、格関係の一般的変容の規則を言うにとどまらず、その述語動詞が「生産」の意味を持つばあいには、「この家は太郎という大工さんニヨッテ建てられた。」のように、ニヨッテが使われなければならないということまで記述すべきだというたぐいである。

第II部は、述語動詞の形態論的考察である。

第1章では、文成立上必須のカテゴリー（肯定・テンス・ムード・待遇）と述語動詞固有のカテゴリー（ボイス・アスペクト・方向性・主体性）との二つを区別し、後者の諸形態とその生起の順序等を論じている。

第2章では、形態論全体のなかで、新しい視点から接辞を論じ、たとえば「山登り用・登り用・登り方」はいずれも言うが、「山登り方」とは言わないというところから、「用」は名詞性の語に接尾し、「方」は動詞性の語に接尾することを指摘する。そのほか、副詞性接頭辞・句接尾辞等についての考察を述べている。

第3章では、複合動詞を論じて、統語論的複合動詞（殴リハジメル等）・語彙論的複合動詞（殴リ倒ス等）・中間的複合動詞（殴リツクス等）の3種を立て、いくつかのテストフレームによってプロトタ

イプ（原型）論的に複合動詞の構造的・意味的特徴を広く分析・解明している。

第Ⅲ部では、述語動詞のボイス・アスペクト・方向性・主体性を論じている。

第1章では、名詞と動詞の格関係を連語論的に論ずる。動詞にとっての必須の格成分と自由な格成分との区別は明確にしがたいところを残すこと、用法的なバリエーションが大きいことなどから、格助詞の置きかえ可能な現象などを手がかりとして、格の類型を考察し、引用の問題や格助詞へとニ（カラがあるとへが出やすいこと等）の問題その他に言及している。

第2章では、ボイス、特にラレル形を論じて、動作主体に対する感情移入の観点から、受身形を取らない所動詞（アル・見エル・要ル等）の意味を、動詞句としての総体的意味から考究するほか、いわゆる自発とまともな受身とのかかわりについて考察している。

第3章では、アスペクトを論じて、動詞の語としてのレベルにとどまらず、動詞句としてのレベルで「過程・維持・結果持続・変化の有無・発生部分」を分析することによって、アスペクトの意味構造を明らかにしようとしている。また、「時定項分析」を提倡して、動きの質的変化をあらわす点の組み合わせによって、副詞的成分を含むアスペクト関係諸形式の意味を、統一的に分析・記述することを試みている。

第4章では、動詞句のdirectionality・場所性を論じて、動きの意味にかかわる方向名詞（ホウ等）・場所名詞（トコロ等）の関与、空間的移動をあらわすテクル・テイクの関与等、多面的に動詞句のdirectionality・場所にかかわる諸問題を考察している。

第5章では、主語名詞の自律的関与の度合いとしての主体性（もくろみ）を論じて、動詞の意志性の有無のみならず、広く動きの発生・成立のしかたを取りあげ、テミル・テオク・ヨウツル・コトニスル・命令・可能等の形の動詞句の意味を、副詞ヒトリデニ・オノズカラ・ウッカリ等とのかかわりにおいて考究し、主体性の段階的な性格を明らかにしている。

第IV部は、文のレベルでの動詞述語の考察である。

第1章では、ムードを論じて、ムード形式自体がテンスの分化を持つか否か、コト（プロポジション）のなかでテンスの分化を持つか否か、さらに、主語の人称制限、述語の品詞性をも考察することによって、ムード形式ダロウ・ラシイ・ヨウダ・ソウダ・ツモリダ・カモシレナイ・ニチガイナイ・ニキマッテイル・テホシイ・タライイ等の意味を、類型化して分析・記述している。

第2章では、動詞述語の重要な一面であるありさま（状態）の文を論じて、存在・性質の二種の立て、「ある」の用法を通して存在述語・性質述語の構文的・意味的特質を論じ、さらに、ガ助詞（動きの表現）とハ助詞（ありさまの表現）の異同の要点に言及している。

第V部（結語）では、本論文全体を概観・総括するとともに、残された諸課題に触れ、構文論と語彙的意味論とのさらなる統合を期するとしている。

本文・注・参考文献（36字30行ワープロ）275ページ、400字詰換算約740枚。

論文の審査結果の要旨

本論文は、語彙的意味とのかかわりを重視して動詞述語文の構成を分析・記述したものである。わが国の意味論的文法研究は、ここ十年ほどのあいだに発展してきたものであって、まとめた著述も一二を数えるにすぎないが、本論文は、いくつかの新事実の発見と、問題点への明晰な考察と、それらをまとめて明確な組み立てとにおいて、この分野での研究に新しい一步を印する論究として評価することができる。

挙げうるポイントは、第一に、その対象範囲の広いことである。特定分野のことではあっても、形態・語句・文の三つのレベルにわたって、一定の観点のもとに一貫して問題を調査・考察し、それぞれに特有の課題を、根本的・理論的に追求するとともに、個別の諸事象の文法的意味分析を踏まえた表現類型として、その体系化をはかっている。この方向で、さらに調査・考察を広く深くしていくならば、やがてはこの立場からする文法論を全面的に構築するに至る可能性を予想させる論考と言うことができる。

第2のポイントは、上記広汎な分野をつらぬくのに動詞述語文の、それも表現類型を以てした見通しのよさである。むしろ逆に、動詞述語文の表現類型という課題を設定したところから、自然に、あるいは必然的に、その対象範囲を広く設定することができたと言うべきかもしれない。動詞および動詞述語文の解明ができれば、名詞・名詞述語文ならびに形容詞・形容詞述語文の解明は、比較的容易である。表現類型の解明が進めば、語および連語の意味構造の解明は、相関して進む。相関して進まなければできないことである。課題設定と論文内容との相即する一つの好例と言うことができる。

第三のポイントは、上記二項と関連するが、プロトタイプ（原型）論的アプローチを心がけ、現象を分類するのにも、分類項間の連續性・中間性を重視し、全体としての段階性を随所に指摘していることである。文法や意味にかかわる言語現象は、いわゆる言語の影・言雲・重層性を顕著に示すものである。客観的言語事実の調査・考察から出発してその類型化をはかりながら、論者が終始柔軟かつ動的に現象を把握するように努めたことは、評価すべき基本的態度と言うことができる。

以上、本論文は草創期のこの分野の研究史に、あらたな礎石を一つ積むものであり、着実な考察と記述は、コンピュータ利用の言語研究のためにも有益な業績の一つであるが、守備範囲の広さは、一面では各章ごとに、あるいは各章間に、少なからぬ課題を残した。それは、論者みずから随所に言及するに至りである。各章内の問題点の詰めとともに、各章間の一層緊密な体系化が要請される。

また、表現類型という用語と概念は、全体から理解されてくるものではあるが、なお、広義で漠然たる印象をまぬがれない。形式・意味・用法の総合概念であるとともに、具体と抽象との中間概念である。これによって、ボイス・アスペクト・ムード・格・主体性等の範疇を具体的に類型化するとともに、動詞句・場所表現等の具体的現象の類型化をはかる。客観的文法記述と体系的文法論との、これも一種の中間的性格の論述であるが、その性格自体に対する一層の根本的省察が望まれる。

また、論述のしかたには、誤記・誤植等を含めて、細心の配慮に欠けるところがある。今後の努力を要する。

以上のように、本論文には残された内外の課題もあるけれども、前記のとおりの新見に富むすぐれた考究であり、論者の研究者としての資質能力をよく示すものである。学術博士（課程）の学位申請論文として、十分価値あるものと認定する。